

伝統と今—3・11 以後の詩歌/Tradition and Now—Poetry after 3/11

高橋睦郎/TAKAHASHI Mutsuo*

ここにお集まりの皆様

私に与えられた講演のテーマは「伝統と今」。私がそこから参りました故国日本の詩歌の伝統と現在はどうなっているのか、ということだろうか、と思います。そのことを述べるのに、私の詩的履歴から始めますことを、お許しいただきとう存じます。私の詩的履歴を語ることが、そのまま日本の詩歌の現在を語ることになろうか、と考えるからです。

私は自分の詩的人生を作品を投稿することから始めました。中学一年生、十三歳の時です。第二次世界大戦四年後の日本には、毎日中学生新聞という中学生向けのタブロイド判の新聞があり、紙面に詩、短歌、俳句、作文、おまけに図画までの投稿欄がありました。私はその新聞の西日本十県を対象とした西部本社版の図画を除くすべての欄に投稿し、何か月かのうちに最も入選・入賞回数の多い投稿者になりました。私に文通を求める各地の中学生からの手紙が毎日のように私の通学する中学校に殺到しました。現在は単なる老いぼれ詩人ですが、当時の私は地方の輝かしいスターでした！

若い投稿者は出発点では、あらゆるジャンルに挑戦します。しかし、二年生、三年生と進級するにしたがって、投稿するジャンルが詩なら詩、短歌なら短歌、俳句なら俳句……というふうに、一つに収斂されていきます。それは日本の詩歌のジャンルのありようによく似ています。日本の詩歌は詩・短歌・俳句とジャンルが劃然と分かれており、作る人も詩人、歌人、俳人と分かれ、お互い他のジャンルを冒さないのが通例です。若い投稿者たちも投稿を重ねる中で、知らず知らずこの通例に従っていくわけです。

*高橋睦郎氏、詩人。Takahashi Mutsuo, poet, essayist and writer.

そんな若い投稿者の中でも、私はとりわけ幼稚だったのでしょうか。投稿を重ねても、始めた時のまま詩・短歌・俳句と、ジャンルを選ばず作り続けたのみならず、六十数年後の現在もなお作り続けています。それだけでは満足せず、古代から近世まで行われた、今はほとんど顧みられることのない二十数種に及ぶ詩形での実作も試みつづけています。投稿のもう一つのジャンルの作文のつづきとして、さまざまな散文を書き、それによって生活費を得ています。世界のどこでもそうであるように、日本でも詩歌のみで食べていくことは不可能なのです。

さて、本論に戻りましょう。民族の起源、そして民族の詩歌の起源は推測の闇に包まれています。現在私が立っているのは中央ヨーロッパ、そのヨーロッパとアジアと一つづきのユーラシア大陸東端の海中に弓なりにある日本列島弧に、現在の日本人の祖先が住みついたのは、どれほどの過去でしょうか。その最初は現在の日本列島弧がまだ島ではなく大陸の一部で、現在の日本海が湖水だった時代とも推測されています。

ともかく、大陸から、南の島々から、何波にもわたってやってきた人々は、混血を繰り返し、日本人の祖型を形成するとともに、日本語の祖型を生み出しました。その原日本語が生んだ原詩歌がどんなものだったかは不明ですが、発達の中で短句と長句の繰り返しという構造を得たようです。しかし、短句と長句の単純な繰り返しでは、どこまで行っても集結感がありません。そこで、短句と長句の繰り返しの最後にもう一度長句を重ね集結感を出すことが考え出されました。考え出した功労者は誰か。特定の誰と言うことでもなく、自然にそうなったというのが真相でしょう。そのうち、しだいに短句は五音節に、長句は七音節に定着しますが、これは古代日本にとっての文化先進国、中国の詩歌の五音・七音の影響があるかもしれません。

短句・長句の、または五音・七音のどれだけかの繰り返しの後に、もう一度長句を、または七音を繰り返すことで終結させる詩形を、のちの呼称で長歌と言います。長歌とはもちろん短歌に対しての言いかたで、短歌は短句・長句・短句・長句・長句、後には五音・七音・五音・七音・七音の五句で完結する詩形で、この詩形の発生についてはさまざまな説があり

ますが、長歌の主題を強調するために長歌の最後の語句を繰り返したのが、後に独立して短歌となったという説が、説得力を持つように思われます。

長歌・短歌を併せて和歌と言います。これは中国から流入した外来の詩、漢詩に対する日本固有の詩、和歌ということです。先進国中国の文化が流入して以来、官僚や僧侶などの教養階級は公的にはもっぱら漢詩を作りましたが、私的な空間に生きた女性たちは和歌、それも五音・七音・五音・七音・七音から成る単純な五句構造の短歌で思いを表現しました。また教養階級の男性も、私的には、とくに女性に対しては短歌を嗜みました。しだいに長歌は作られなくなり、和歌といえば短歌を指すようになりました。

和歌は詩歌の中心であるだけでなく、文学の中心でさえありました。千数百年の歴史を持つ日本文学史の中で一作を選べといわれれば、『源氏物語』ということになりましょうが、この五十四巻から成る長大な物語は、基本的に主人公の光源氏と女君たちとの和歌のやりとりから出来ています。ある意味では和歌たちこそが真の登場人物とさえ言えそうです。五十四巻それぞれの巻の名もその巻に登場する和歌の一部分から採られています。

それほど盛んだった和歌すなわち短歌ですが、その単純な詩形のせいもあり、十二世紀末を持って貴族の時代が終わり、武士の時代になると衰えます。代わりに盛んになるのが連歌で、これは短歌の五七五七七を上句五七五と下の句七七を別の人が作る一種の言語遊戯で、上の句に下の句を連ねて作る歌という意味で連歌と呼ばれました。さらに五七五プラス七七で終わるものを短連歌、短連歌の七七にさらに五七五を付け、五七五に七七を付け……というふうに長く付けていくものを長連歌と呼びました。長連歌は何人も人が参加して変化を楽しむことができるので、貴族、武士、僧侶から庶民までが加わり、大流行になりました。中で最も優れた作者を一人挙げれば十五世紀に活躍した庶民出身の宗祇で、彼が二人の弟子と作った『水無瀬三吟』は連歌の最高傑作とされます。

しかし、連歌もそのうたう世界は和歌の場合とさほど違わなかったので、いつか倦きられてきました。そのとき連歌に代わったのが大胆に庶民の世界を採り入れた俳諧でした。俳諧も最初は言語遊戯、それともかなり低俗な言葉遊びでしたが、十六世紀後半に、これまたぶん庶民出身の芭蕉が

出てかつての和歌に匹敵する、ひょっとしたらそれ以上の高みに俳諧を引きあげました。俳諧、正確に言えば俳諧連歌。基本的には上の句五七五と下の句七七を連ねてつくることでは連歌と同じ。ただ創作態度としては、連歌の古典主義に対して現実主義といえるかもしれません。

俳諧もまた江戸という新時代の詩歌の中心であるだけでなく、文学の中核でもあったといえます。江戸時代最高の小説家と言えは西鶴でしょうが、彼は芭蕉の同時代者、彼自ら俳諧師をもって任じていたとおり、彼の小説の文体は俳諧によって鍛えられたものです。西鶴より一世紀遅れて登場する秋成小説の文体も、俳諧の影響顕著です。

十九世紀後半、日本は二百年余続いた鎖国を解いて、世界に門戸を開きます。欧米の poetry の影響で新体詩という新しい詩形が登場します。新体詩はやがて近代詩、現代詩となっていくます。これに刺激を受けて子規が俳諧の第一句である発句を独立させ俳句という世界最短の詩形を確立しました。近代俳句の誕生であり、現代俳句に続きます。子規は俳諧改革と共に和歌改革もやってのけ、ここから近代短歌が始まり、現代短歌に繋がります。

そんな歴史の結果、現在の日本の詩歌には、現代短歌、現代俳句、現代詩の三つのジャンルがあります。それぞれの作者を歌人、俳人、詩人と呼び、お互いの領域を侵さないのが暗黙の了解です。そんな中で三つのジャンルを作りつづけるのみか、現在はほとんど作られることのない過去のさまざまな詩形までを試みつづけている私は、困った掟破りということになりましょう。そんな私の肩書きを何としたいらいいか迷う編集者もいて、詩人・歌人・俳人と三つ並べましょうかなどと問われることがあります。私は詩人だけで結構ですと答えます。本当は詩人という肩書きもおこがましいと思っています。正しくは詩を探し求めている者にすぎなくて、さまざまな詩形を通して真の詩を追っかけているというのが真相だからです。

現代詩だけでも大変なのに、なぜ現代短歌、現代俳句まで欲張るのか。だいいち、短歌や俳句のような短い詩形で表現できることは限られているではないか。こんな質問というか意見を呈されることがしばしばあります。これに対する私の回答は決まっています。現代詩に表現できて、現代短歌

や現代俳句に表現できないものがあると同時に、現代短歌や現代俳句に表現できて、現代詩に表現できないものもある。そう答えます。

わたしはそのことを 21 世紀に入ってから 11 年間に勃った二つの事件によって思い知らされました。一つは 2001 年 9 月 11 日、アメリカ合衆国での同時多発テロ、今ひとつは 2011 年 3 月 11 日、東日本での大地震・大津波とその結果の原子力発電所事故。いわゆる 9・11 と 3・11 です。9・11 の時、日本の詩歌でもっとも敏感に反応したのは現代短歌でした。そして 3・11 の時、もっとも真摯に対応できたのは現代俳句でした。残念ながら現代詩はどちらの場合にも有効に答え得たとは思えません。二つの事件の深刻に対して、現代詩は喋りすぎるのです。

短歌五七五七七も、俳句五七五も、極端に短い詩形です。極端に短い詩形は結果的に沈黙を含み込まざるをえません。その止むを得ざる沈黙が、なまかな雄弁よりはるかに有効に事態の深刻に答え得た、ということでしょう。とくに 3・11 の場合にそのことが言えます。3・11 は当初大地震とそれによる大津波との天災と認識されました。ところが時間の経過と共に、原子力発電所の事故の方が更に大変であることが分かってきました。

原子力発電所の事故は直接的には地震および津波の結果です。しかし、数々の良心的な警告があつたにもかかわらず、安全を過信し経済上の見地から原子力発電所を海岸に近く十分な防護策も施さず建設した結果が、地震や津波の影響をもろに被ったことを考えれば、明らかに人災です。

では、原子力政策を推し進めた政治家や官僚、財界人を責めれば、それで済むのか。ことはそう簡単ではありません。じつは私たち日本人全体がより豊かに、より便利に暮らしたい思いから、原子力推進者たちの言うことを疑うこともなく鵜呑みにしてきた現実があります。飽くなき欲望と怠惰からこの事態をもたらしたわたしたち一般市民も、被害者であると同時に加害者なのです。被害者としての私たちの告発は必然的に私たち自身に向かわなければならない。

翻って 9・11 についても同じことが言えるのではないのでしょうか。たしかにあのアメリカ合衆国における同時多発テロの加害者は当のテロリストたち。しかし、彼らを駆り立たせたものが合衆国に代表される資本主義の暴力だとしたら、合衆国の国民は収入の多寡にかかわらず被害者であり

加害者、合衆国と安全保障条約を結んでいる日本国の詩歌に関わる私たちも、たとい僅かにもせよ作品の対価を資本主義に属するジャーナリズムから得ている以上、被害者であるとともに加害者であることを免れない。さらにいえば、人間が本質的に欲望と怠惰の存在である以上、資本主義と反資本主義のどちらに属するかを問わず、被害者であり加害者であることを免れません。

鈍感な私たちは 10 年を経て 3・11 を体験し、やっとそのことに気づきました。もし 9・11 の段階で気づいていたら、9・11 について書かれた詩のみならず、短歌でさえ饒舌に感じたかもしれません。事実、それらの短歌をいま読み返すと、いささかしやべりすぎに思えないでもありません。そして、9・11 の時黙り込んでいた俳句が、3・11 以後ためらいがちに口を開きはじめました。

それも日本全体でというわけではありません。もっぱら被災地である東日本における俳句が語りはじめたのです。被災地以外の俳句にとって、3・11 について語ることは憚られるところがあるのです。じつは私自身、被災地に行くことをためらってきました。直接の被災地から見れば、とりあえず安全圏にいる私が被災地に行くことは、まるで安全なカプセルに護られて高みの見物を決め込んでいるような後ろめたさがあって、憚られたのです。

しかし、ためらってばかりもいられません。3・11 からまる 2 年目——日本には死から 2 年目を三回忌と称してその死者を改めて深く追悼する習慣がありますが——にやっと決心が着き、被災地にあってもっとも良質な俳句を作り続けている友人の導きで、2013 年 3 月 11 日を中心に置いての 3 日間、とりわけ甚大な被害を受けた土地を巡りました。その中に原子力発電所事故の被害地、福島が含まれていなかったことを告白しなければなりません。被害が過去形でなく現在進行形で存在し続ける土地にどんな立場で臨めばいいのか、自分の中で決められなかったからです。

3・11 から 2 年を経過して、まだどんな復興のめどもたっていない被災地のそこそこで、私は呆然と立ち尽くしただけ。一篇の詩も、一首の短歌も、一句の俳句も出来ませんでした。ぼんやりと一曲の能の構想が浮かんできたきりです。能は 14 世紀から 15 世紀にかけて形成された日本の代表

的古典演劇で、その詞章は古典詩歌の凝縮された高度な劇詩。その大成者、世阿弥はしばしば和歌の人麿、俳諧の芭蕉と並べ、三代古典詩人と讃えられてきました。

主要なものは復式夢幻能と呼ばれ、古い歴史や伝統で知られた土地の夕暮、その土地を訪れた旅人——多くの場合、各地を旅する僧侶——の夜の夢の中に登場したその歴史や伝説の主人公または女主人公の霊が生前・死後の苦悩を語り、旅人にその祈りによって今なお続く苦悩から解放してほしいと願い、旅人は霊の願いに応えて祈り、霊は解放された悦びまたはなお続く苦悩を舞によって表現し、暁の光の中に消えていくというものです。

私はすでに二十歳代の終わりから何篇かの能の詞章を試み、そのうちのいくつかは上演されています。最近上演されたものでは、17世紀のピューリタン革命挫折後の詩人ミルトンの夢に紀元前師士時代の伝説的人物サムソンの霊が登場して、自分の悲劇的生涯を詩化することで救霊してほしいと願うというもの。ここに倒立したかたちでの9・11の影響があることを上演後しばらく立ってから気づきました。

そして三回忌の東日本——そこは国土を走る道の果ての奥なる闇を意味するみちのくの通称をもって呼ばれ、日本の建国以来くりかえし国家の負性を背負われ、地震、津波の被害にも過去何度も遇っています——で、今回の災害も含め、過去さまざまな受難にあった無数の霊たちが立ち上がってくるのを感じ、これらの霊たちの救霊・鎮魂の能が書けないものか、と考えたのです。

しかし、3・11に対してなぜ詩でも短歌でもなく俳句が有効だったのか。ある意味そのことの検証のために3・11の現場に行ったはずの私なのに、唐突に能の構想が浮かんだのはなぜか。被災地訪問から1年近くぼんやりと考えていて、このところ思い当たったことがあります。それは俳句と能が共に死者と深く関わる詩歌であり舞台芸術であるということです。

俳句という詩歌の内容的中心を成すのは季題・季語ですが、その中の重要なものの一つに忌日題があります。芭蕉忌、人麿忌、世阿弥忌というように、芸術・芸能の先人たちの亡くなった日に、その遺徳を顕彰し自らの志の成就を祈念する、言い換えれば死者たちと対話するための季語・季

題です。さらにいえば季語・季題は先人たちから受け継いだものであり、その季語・季題によって俳句をつくることは、死者の目・耳・魂を借りて世界の意味を問うことではないか。そして、能は正に死者との対話の詩です。

2001 年に始まる新世紀はおそらく人類史始まって以来、始めて人類の終末が射程に入ってきた世紀、と言えましょう。世紀末にどんな動乱が続こうと、どんな疫病が猖獗しようと、世紀の始まりは人類の未来に一条の光を齎したもの。しかし、二十一世紀の始まりばかりは違いました。人口は加速度的に膨張して七十億に足らんとし、膨張した人類は国家次元でも個人においても飽くなき欲望を剥き出しにし、ために大気は汚染され、大地は生産力を収奪され、結果的に人類の未来を危うくしていることに気づかぬふりをしてきた。

しかし、そのままでは人類の未来はおろか、自分自身の生命も全う出来るか、怪しくなってきた。この不安に駄目押しをしたのが、新世紀第一年の 9・11 であり、それから 10 年後の 3・11 だった。そういういま問うべき相手は、欲望に雁字搦めの生者ではなく、死者。死者に問うには饒舌であってはならない。裡に深い沈黙を湛えた言葉を持って問わなければならない。死者の答えは沈黙をもってなされるだろう。豊かな知恵を隠し持つ沈黙。その知恵を聞き取るヒントを、私は死者文芸である俳句に、能に探したい。それが伝統を踏まえたいまの私の当面の決意であることを報告して、今日の講演の結びといたします。

ご清聴、感謝申します。